

The background of the entire page is a detailed illustration from the game Diablo V. It depicts a central figure, likely a high-ranking cleric or saint, seated on a throne. He has a long white beard and is wearing ornate, golden and white robes. He is surrounded by several other figures, some standing and some kneeling, all with glowing halos around their heads, suggesting they are holy or powerful. The setting is a dark, cavernous or forested area with greenish light filtering through. The overall tone is dramatic and religious.

DIABLO®

VESSEL OF HATRED™

アカラットの ナハントウ来訪

短編小説 作：
MATTHEW J. KIRBY

ストーリー

MATTHEW J. KIRBY

イラスト

RICHARD ANDERSON

編集

CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション

COREY PETERSCHMIDT

ロア・コンサルテーション

IAN LANDA-BEAVERS

クリエイティブ・コンサルテーション

NICK CHILAN, GABRIEL LING, DAVID LOMELI,

ELENI RIVERA-COLON, DAVID RODRIGUEZ

プロダクション

BRIANNE MESSINA, AMBER PRUE-THIBODEAU,

CARLOS RENTA

スペシャルサンクス

ROD FERGUSSON

翻訳

SHINGO ENDO, RYOSUKE OKUYAMA



© 2024 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardとBlizzard Entertainmentのロゴは、米国またはその他の国における

Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

この物語はフィクションです。名前、登場人物、場所、出来事は作者またはアーティストの想像の産物であるが、架空の存在として使われており、生死を問わず実在する人物、事業体、出来事、場所に類似するものがあつたとしても、それはまったくの偶然です。

Blizzard Entertainmentは作者または第三者のウェブサイトおよびそのコンテンツについて一切管理を行わず、それらに対する一切の責任も負いません。

アカラットのナハントウ来訪

これから語られるのはアカラットと狼の物語。

真実は肉体の世界と精神の世界を越えられる者が知る。この物語は我々の歴史。これは我々が長老たちから伝えられ、その長老たちも以前の長老たちから伝えられ、その長老たちも以前の長老から伝えられ、その長老たちは、顛末を目撃したアカラットの信奉者から伝えられた物語。これはナハントウのスピリットボーンたちの中で語り継がれる物語。語り部がジャングルのウンバル族であろうと、あるいは平原のテガンザ族であろうと、含まれる英知は全ての者が得られるものとする。多くの者が忘れてしまったのをいいことに、邪悪なる者はこの物語を自らの傲慢さや支配欲のために悪用している。

聞くがいい、ナハントウの子供たちよ。聞くがいい、サンクチュアリの全ての後継者たちよ。アカラットの真の物語を聞くのだ。聞くがいい、汝ら光の探求者として他者を見下し、アカラットの願いを汚す者たちよ。聞くがいい、汝ら光の道を敷き、アカラットの名において金をせしめる者たちよ。真実を聞くのだ、望まれざる従者たちよ。さもなくばお前は憎悪に飲まれるだろう。

アカラットのナハントウ来訪は荘厳なものではなかった。クラストの通りを輿に乗って通ることも、称賛や崇拝を受けることもなかった。求められる存在ではなかったのだ。到来を告げる予言もなかった。予言があった

としても、希望を失っていた当時のナハントウの人々がそれを信じることはなかっただろう。ある病が土地に広がっていた。生い茂るジャングルと肥沃な平原が病によって荒廃していた。獣たちが猛猛かつ食欲になっていた。腐敗が根を張り、膿んだ潰瘍のように広がっていた。災いをもたらす種が弾けた場所では土地が腐り、毒にまみれた。病に歪められ、穏やかな動物ですら血を求めようになった。マングローブが捻じ曲がり、平原は荒野となった。まるでナハントウが呪われた地となり、民は破滅し、絶望の中で飢えるままに見捨てられたかのようだった。

ウンバル族の多くは降りかかった災厄から逃げ出し、遠く離れた見知らぬ土地に安息を見出そうとした。アカラットの母親もそんな船旅に出た移民たちのひとりて、アカラットは後に、彼女とシャンサイに住んでいた父親の子として生を受けた。そのため彼にとって、ナハントウを訪れるのは帰郷のようなものだった。

彼の傍にはイセヴェテがいた。彼女は希望と慈愛に満ち、今ではアカラットの最初の信奉者として知られている人物だ。アカラットとイセヴェテは古くからの友人で、子供の頃からきょうだいのように互いを大切に思っていた。二人の絆は深く、シャンサイを離れるアカラットにイセヴェテも同行し、ケジスタンでの旅の間、彼女は心強い相棒であり続けた。アカラットとイセヴェテと共にナハントウを訪れた者が他に三人いた。地図職人のアダヴィン、巧みなるイスタベラ、強固なる意志のグイラだ。

ケジスタンの砂漠が終わり、ナハントウの曲がりくねったつる植物が姿を見せ始める場所にある壮大なアルゲンテック川を、この五人が一緒に渡ったときのことだ。一行が対岸に近づくにつれ、ほっそりとした小舟の下を流れる水は淀んで悪臭を放つようになり、闇や血のように黒ずんだ。アカラットは小さな翡翠の彫刻を握り締めた。それは彼がシャンサイから持ってきた数少ない品のひとつだった。濃くなっていくジャングルに太陽を遮られ、彫刻の輝きが弱まったように感じた彼は、小さな像を自らの胸元に近づけた。

「師よ、聞いてもいいですか？」とアダヴィンが言った。

アカラットは辛抱強く言った。「アダヴィン、何度も言ったように私はお前の師ではない。我々は光を求める同志だ」

アダヴィンはかぶりを振った。「その通りです。お許しください、師よ」

アカラットは溜息をつき、自らの信奉者に目をやった「聞きたいことがあるのだろうか」

「何を持っておられるのですか？」

小舟に乗った他の者たちが櫂を漕ぐ手を止め、沈黙が訪れた。イスタベラも彫刻のことが気になっており、それはグイラも同じだったが、どちらもそれを聞ける立場にはないと思っていた。イセヴェテはアダヴィンの質問の答えを知っていたが、彼女はアカラットがどう答えるのかと様子を見た。

「これは私の母が持っていたものだ」とアカラットは口を開いた。「いつか母の持ち物を先祖代々の土地に戻すことができればと思って、シャンサイからずっと持ち歩いてきた」彼は沼地の先を見つめた。「だがようやくたどり着いたその場所は、母に見せたいとは思えない有様になっていた」

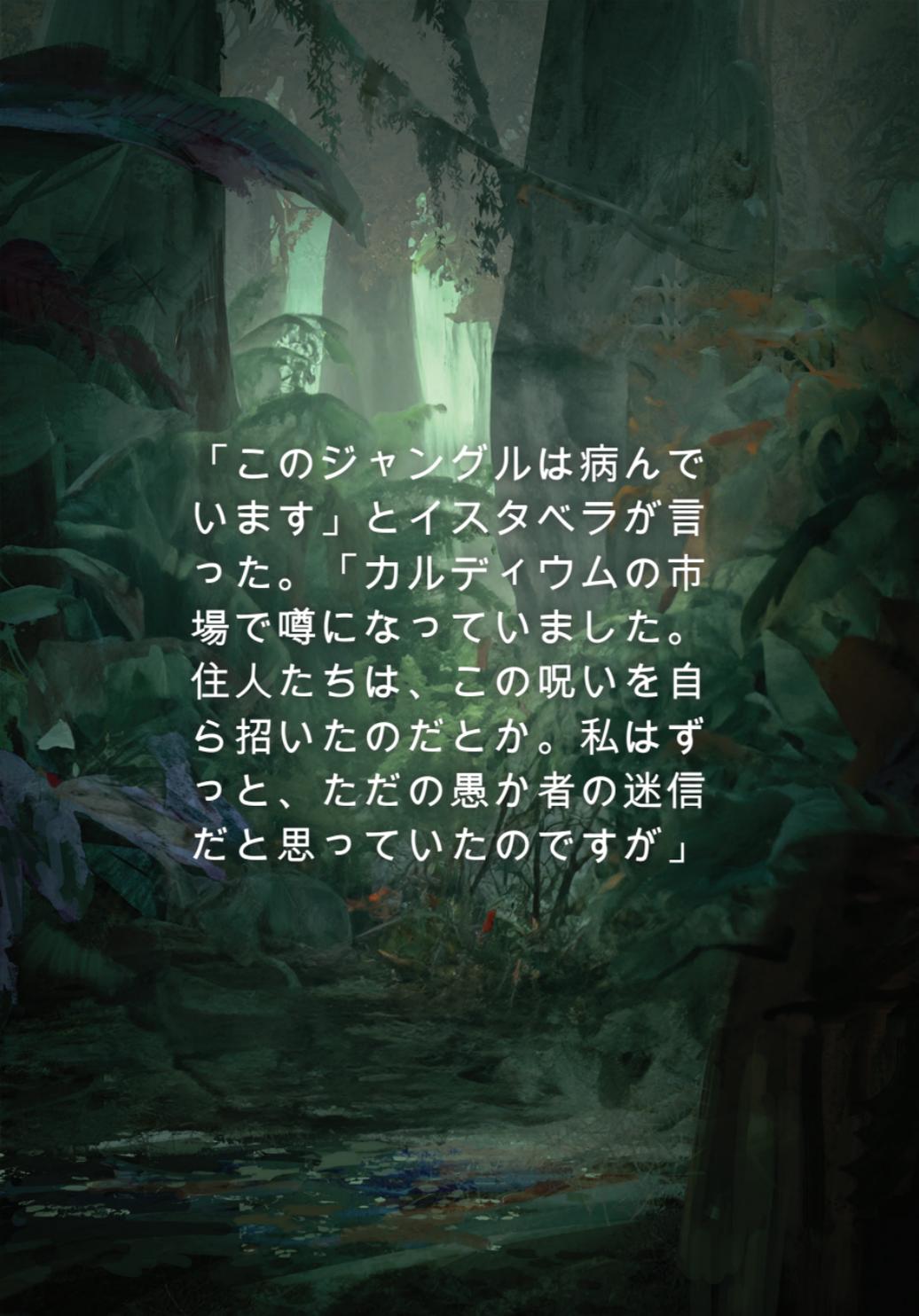
「このジャングルは病んでいます」とイスタベラが言った。「カルデイウムの市場で噂になっていました。住人たちは、この呪いを自ら招いたのだとか。私はずっと、ただの愚か者の迷信だと思っていたのですが」

「実際にそうなのでしょうね」イセヴェテが言った。「父は言っていたわ。迷信は病ではなく、犠牲者が病を患ったことを責めると。」

「至言だね」アカラットは言いながら翡翠の小像をしまった。

小舟が岸に辿り着くと、一行は舟を降りた。沼地に足を踏み入れてからほどなくして、信奉者たちは怖気付いた。息苦しさを覚える痺気が立ち込め、それが呼吸をするたびに胸に入り込んで心臓を締め付けた。ジャングルそのものに憎しみをぶつけられているかのような重圧を感じ、信奉者たちは怯んだ。沼地の中で足取りは重くなり、勇氣は揺らいだ。アカラットだけが、臆することなく大股で進み続けた。信奉者たちがアカラットに続こうとしたが、彼の歩調に付いていけなかった。

アカラットは信奉者たちが苦しんでいることに気付いた。見れば震えている三人を、アカラットは立ち止まらせた。彼は腐った丸太の上に座り、信奉者たちが怪訝な表情を浮かべる中で靴を脱ぎ始めた。「村の治療師



「このジャングルは病んでいます」とイスタベラが言った。「カルデイウムの市場で噂になっていました。住人たちは、この呪いを自ら招いたのだとか。私はずっと、ただの愚か者の迷信だと思っていたのですが」

が、自らの手を血で汚さずにいられると思うかね？」と彼は聞いた。

信奉者たちが互いに目を合わせてから、同時に「いいえ」と答えた。

「その通り」アカラットは笑顔を浮かべて言った。「そんな治療師は間違いなく腕が悪い。私なら、手を汚さない治療師は信用しない」彼は立ち上がり、穢れた泥の中に裸足のまま入って信奉者たちを驚かせた。「治療師が傷口を閉じ、膿んだ傷を清め、熱を出した流行り病の患者を宥めるには、腐敗に触れなければいけない。この地に蔓延る邪悪の正体はまだ分からないが、イセヴェテの父の賢明さと、この土地自体は邪悪ではないことを思い出した」彼は前後に足踏みし、子供のように上機嫌な様子でピチャピチャと音を立てた。「サンクチュアリの大地を踏みしめる時、私はどこであろうとそこに光を感じるのだ。このような見捨てられた土地であっても、私は光と繋がっている。お前たちだって繋がっている。必要なのは、それを感じようとするのだ」

「靴を履いたままでもいいですかね？」アダヴィンが聞くと、他の者たちから好意的な笑いが起きた。

「いいだろう」アカラットは笑った。「靴が光を隔てることはない。光は我々全ての中にある」

そして信奉者たちは心を鎮めた。三人は己が内にある光に手を伸ばし、その輝きによって、ナハントウの中にも光を見た。光はナハントウの川やせせらぎのように自由に流れようとしていたが、その正常な流れは腐敗に束縛され、締め付けられ、堰き止められていた。

「見えるか？」アカラットは信奉者たちに聞いた。「我々はなぜここに来て、何をすべきなのかが分かるかね？」

「分かります」とイスタベラ、アダヴィン、グイラが言った。

だが、イセヴェテがこう言った。「他にも何かがあるわ。未知の何か。この光は妙よ。まるで、深海の上を歩いているような感覚」

アカラットは頷いた。「恐らくお前の父親がナハントウ出身だからだろう。母親が同郷だった私も、お前と同じものを感じている。まだその意味は掴めていないがね。色々と私に聞きたいことはあるだろうが、それはまたの機会にしてくれ。今は進もう」

そしてアカラットは一行をジャングルの奥深くへと導いていった。可能

な限り道を見つけて辿ろうとしたが、貪欲に伸びる蔓や変化し続ける地形のせいで、どの道も長くは続かなかった。見つけた道はどれもすぐに沼地に入り込むか、通り抜けることができない茂みに飲み込まれ、引き返して別の道を探さなければならなくなった。

アダヴィンが苛立ちを露わにして言った。「将来の旅人のため、この土地の地図を作るとしましょう」

「お前の技術は素晴らしい」とアカラットは言った。「しかし、この変わりやすい土地では、どのような地図も完成する頃には役立たずになっているだろう」

一行の周りの水辺で生き物がうねり、何かを吹き出すような音を立てて身をよじった。姿は見えないが、大きな波紋や、突然上がった水しぶきから、汚い水面の下にいる何かの巨大さが察せられた。吸血性のハ工が首や顔から血を吸ってきた。頭上の枝には巨大な蜘蛛の巣が張られていた。また遠くから、獲物の断末魔を掻き消すように獣の遠吠えと咆哮が聞こえた。大地に拒まれ、先へ進むのは困難だった。信奉者たちは常に邪悪な存在を感じていたが、光が三人を勇気づけた。ナハントウが活力を与えた。

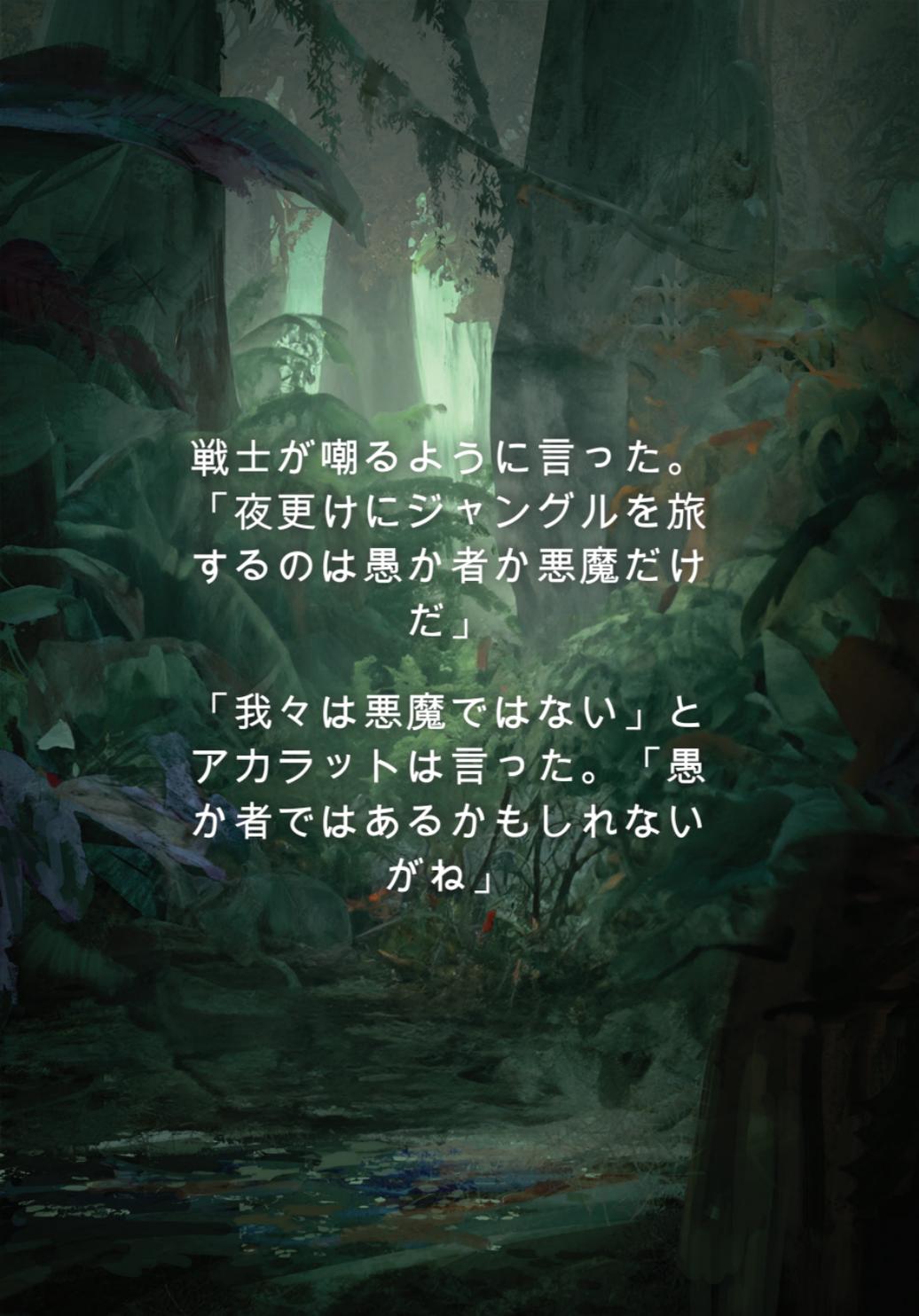
ジャングルの林冠に日光が遮られるせいで余りにも早く日没が訪れ、訪れる夜は、信奉者たちが初めて見る真の闇をもたらした。まさに完ぺきな暗闇だった。一行は野外で夜を過ごす危険性を熟知していたが、夜になるまでに集落か町を見つけることは叶わなかった。イスタベラの松明を頼りに進んだものの、少し進んだところで、恐ろしいネズミのような生き物の群れが襲いかかってきた。

木々から突如としてあふれ出した生き物はそれぞれが犬ほどの大きさで、涎を垂らし、丸い鼻から金切り声をあげた。

その爪と歯が信奉者たちに食い込もうとしたとき、アカラットは声を張り上げて「来るな！」と命じた。

アカラットの気迫と輝きに獣たちは突撃を止め、混乱した様子だったが、怖気付いたというほどではなく、まだ襲撃を諦めていなかった。この猶予を利用して信奉者たちは武器を構えた。

当時のアダヴィンは弓を携えていた。イスタベラはアカラットに会った前の盗賊時代と同じく、ナイフを愛用し、それを身の回りに隠し持ってい



戦士が嘲るように言った。
「夜更けにジャングルを旅
するのは愚か者か悪魔だけ
だ」

「我々は悪魔ではない」と
アカラットは言った。「愚
か者ではあるかもしれない
がね」

た。グイラの武器は、一族の魔術師が代々引き継いできた杖だった。イセヴェテが振るうのは、先端が太陽の形をしている黄金のメイスだ。アカラットは光とフランベルジュの使い手だった。気を取り直して攻撃を仕掛けてきた獣たちは、獲物に迎撃の準備を整えさせてしまったことを思い知った。アダヴィンの矢は狙いを外さなかった。イスタベラはナイフを突き刺し、切り付けた。グイラとイセヴェテは、これでもかとはばかりに敵を打ちのめした。アカラットは剣と光を存分に振った。信奉者たちは善戦したが、群れの数はあまりにも多く、防ぎきれなくなるのは時間の問題に思われた。

その時、屈強なウンバル族の戦士が戦いに加わった。彼の槍がたくさんの獣を瞬く間に始末したことが獣たちの血への渴望を挫き、攻撃が止んだ。そしてまだ動けるネズミたちは、闇の中へと逃げていった。

信奉者たちがウンバル族の戦士に感謝の気持ちを伝えるよりも早く、見知らぬ男がアカラットに槍を向けた。「お前は何者だ？」そして問いただしてきた。

信奉者たちが師を守るために駆け寄ろうとしたが、アカラットは落ち着いた表情で三人を留ませた。そして彼は剣を鞘に収め、何も持っていないこと示すように手を上げた。「私の名はアカラット」彼は言った。「我々はただの旅人だ」

戦士が嘲るように言った。「夜更けにジャングルを旅するのは愚か者が悪魔だけだ」

「我々は悪魔ではない」とアカラットは言った。「愚か者ではあるかもしれないがね」

「裸足で穢れた水に浸かっているんだ。議論の余地はない」戦士が言った。

アカラットは笑った。「そう言うあなたは何者だ？我々と同じくこうしてジャングルにいるが、間違いなく悪魔ではないし、愚か者でもないだろう」

戦士はまだ警戒を解いていなかったが、アカラットと信奉者たちに敵意がないことが分かり満足したように見えた。彼が槍を背中に戻した。「弟を探していた。今日、近くの村から戻ってくるはずだったが、姿を現さな

いし知らせも届いていない」

「弟さんの捜索を手伝うわ」イセヴェテが言った。

戦士が驚きと疑いの表情で彼女を見つめた。「見知らぬ者が、見知らぬ者を探すのを手伝うと言うのか？」

イセヴェテが答えた。「あなただって、見知らぬ我々を助けて戦ってくれたじゃない。助けを要する者ならば助けを申し出よ、と言うでしょう」

「確かにその通りだ」男が言った。「本当にそうしてくれるなら、心から感謝する。だが夜が明けるまで、できることはほとんどない。もっと恐ろしい、死の臭いに引き寄せられる連中がいるのだ」

アカラットは言った。「ならば明日、新たな日の光のもとに捜索を手伝うとしよう。あなたの名は？」

「俺はトゥセガだ」男がそう言って、戦いの後の周囲の惨状を見回した。「この哀れな連中を殺すと悲しくなる。古い言い伝えによれば、昔の彼らは葉や草しか食べなかった。臆病で争いを好まない生き物だったのだ。それが何の非もなく、悪魔の種によって狂気に追いやられてしまった」

「悪魔の種とは？」グイラが聞いた。

「ナハントゥに蔓延する憎しみの病は、この地で生まれたものではない」トゥセガが言った。

「その通りだ」そう言ったアカラットは、突如として嫌な予感に襲われた。最大にして究極の敵のことが脳裏によぎったのだ。「この腐敗は“憎悪”に満ちている」

アカラットのことをよく知り、その機微に通じているイセヴェテが彼に尋ねた。「何を感じたの？」

「お前が心配する必要はない」アカラットは言った。

その後、トゥセガに彼の村へと案内されたアカラットと信奉者たちは、そこでトゥセガが尊敬を集める村の治療師にして指導者であることを知った。アカラットと信奉者たちが招待された彼の家は、治療薬やポーシヨンの材料となるさまざまな薬草や木の根、花で溢れていた。

「豊富な知識と技術を持っているようね」イセヴェテが言った。

「エリクサーは治療のほんの一部でしかない」トゥセガが言った。

「では、大部分は？」イセヴェテが聞いた。

「精霊だ」トゥセガが答えた。「精霊なしでは、俺の薬はほとんど役に立たない」

彼の言葉にアカラットは満足していた。彼はトゥセガとの出会いは光の導きだと考えていた。もっとも、トゥセガがそのことに気付くにはまだ時間がかかるだろうが。

翌朝、トゥセガの弟を探すためにジャングルに向かった信奉者たちは、トゥセガの目を通してナハントウを再発見することになった。トゥセガは最も乾燥した道を見つけて歩く方法を教えてくれた。また不注意な旅人がそこに沈んだら決して見つからない、底なし沼を避ける方法も教わった。食べられる植物と、口にした途端に命を落とすであろう植物も教わった。襲ってくる獣を避けて不要な戦いを避けられるよう、注意すべき音も教わった。トゥセガが一行に教えたのは、ナハントウの真の姿を見る方法だった。

「多くの者がこの地を去ったのに、ここに留まっている理由を聞いても？」グイラが聞いた。

トゥセガがしばらく考えてから答えた。「俺が留まったのは、まだこの地に精霊を感じられるからだ。しかも、悪魔の種よりも強くな」

「私もそれを感じる」アカラットは言った。「ナハントウの纏繞の森に入ると、すぐに安息を感じた。無意識に求めていた何かに出会ったような感覚だった」

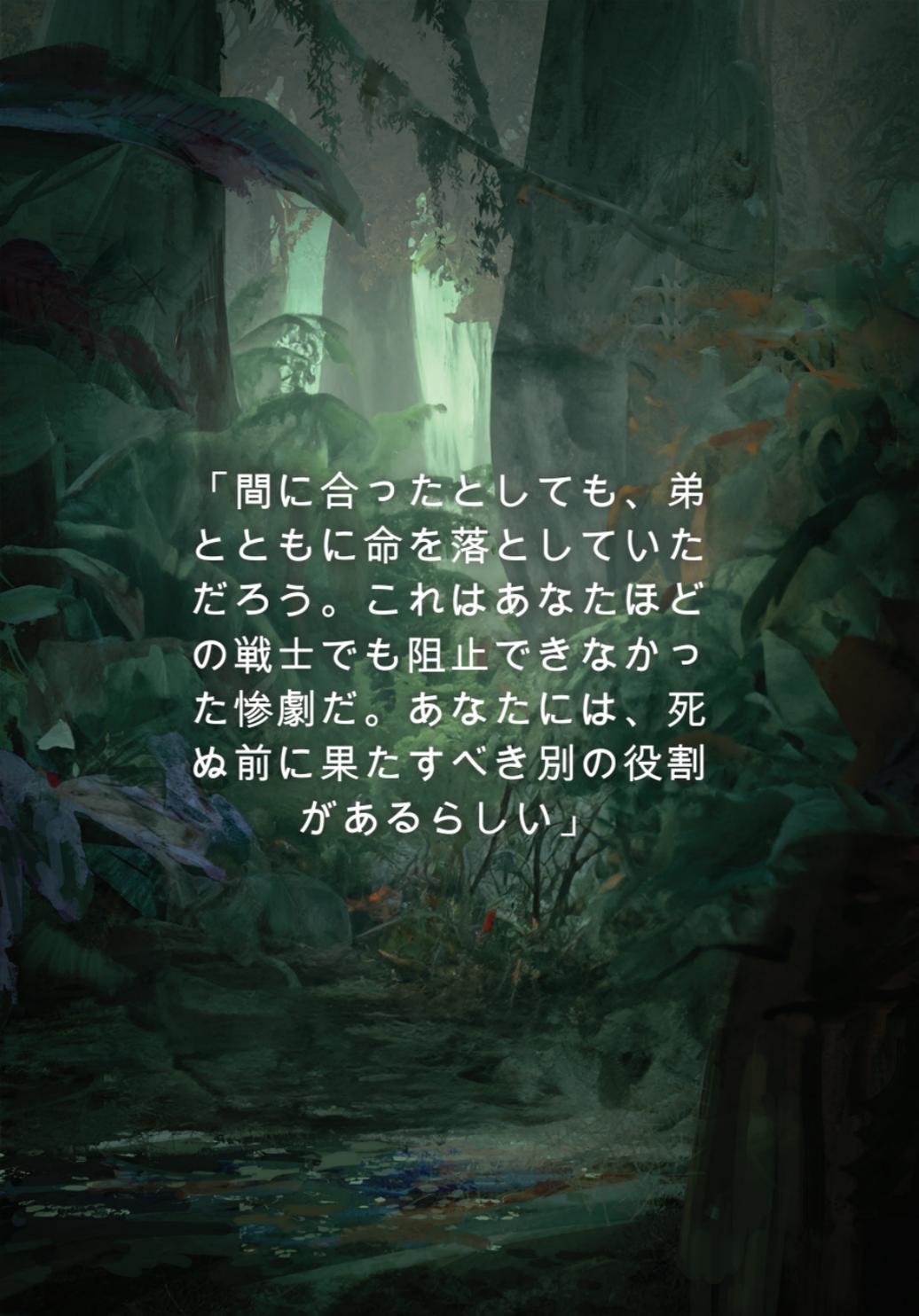
「師よ、精霊とは何なのですか？」アダヴィンが聞いた。

「正体は分からない」アカラットは答えた。「だが感じるのだ」

「光と同じ存在なのでしょうか？」グイラが聞いた。

「いや、違うだろうな」アカラットは言った。「だが、精霊を感じることもできるのは光の恩恵だ」

トゥセガの弟の搜索を続けた一行は、人気のない場所にある一軒の邸宅に辿り着いた。トゥセガはそこに住む者たちに弟を見なかったか尋ねようとしたが、答えられる者はいないことをすぐに悟った。その家の人間は一人残らず殺され、しかもそれほど時間が経っていない様子だった。バラバラにされた死体は積み上げられ、その上に大量の蠅がたかっていた。犠牲



「間に合ったとしても、弟
とともに命を落としていた
だろう。これはあなたほどの
戦士でも阻止できなかつ
た惨劇だ。あなたには、死
ぬ前に果たすべき別の役割
があるらしい」

者の血が地面を濡らしていた。イスタベラが切り刻まれた子供の遺体の上にかがみ、涙を流した。悲しみと恐怖に圧倒され、長い間、誰も口を開かなかった。そしてトゥセガが死者たちの中に弟を見つけた。目が切り取られ、鼻と耳は頭から引きちぎられていたが、首に掛かったままのビーズの首飾りを見て、トゥセガは彼が弟であることを知った。アカラットと信奉者たちはトゥセガが遺体を集めるのを助けた。そうすれば彼らを火葬し、眠らせてやることのできる。

「トゥセガ、こんなことになって本当に残念だ」アカラットは言った。

そしてイスタベラが言った。「我々のせいだ。我々が助けられたせいで、救出が間に合わなかったのでは？」

トゥセガが、かぶりを振った。「お前たちを見つけたのが弟でも、俺と同じことをしたはずだ。あいつは部族のために戦って死んだ。後悔はないだろう」

死者を想い、怒りに燃えるグイラが言った。「我々が光の力で戦っていれば、あの者たちは命を落とさずにすんだかもしれません」

だが、アカラットは彼女をなだめて言った。「光があらゆる苦痛と死を阻止できる訳ではない。光にそのような力はないし、我々はそういった理由で光を求めているわけでもない」そして彼はトゥセガに言った。「間に合ったとしても、弟とともに命を落としていただろう。これはあなたほどの戦士でも阻止できなかった惨劇だ。あなたには、死ぬ前に果たすべき別の役割があるらしい」

「どんな役割だ？」トゥセガが聞いた。

「我々はナハントゥに蔓延る腐敗を浄化するために来た」アカラットは言った。「そのために、あなたに助けてもらいたい」

「どうやって？」トゥセガが聞いた。「この邪悪に立ち向かえるというお前は何者だ？」

「大した者ではないさ」アカラットは言った。

そしてアカラットはトゥセガに光について教えた上で、ナハントゥに腐敗を広げている悪魔の種を見せるように言った。アカラットと信奉者たちが憎しみの種の蠢く根に光を当てると、その輝きの強さは種に宿る巨悪にすら勝り、根は枯れ、種は消えた。これを目の当たりにしたトゥセガはア

カラットの第五の信奉者となり、その後、アカラットたちの案内役としてジャングルの中で憎しみの種を探した。一行は共に多くの危険に立ち向かい、辛い試練を生き延び、無数の困難を耐え抜いたが、その物語はまた別の機会に話すとしよう。

やがて光や、アカラットとその信奉者たちの努力により、ごく一部ではあるがナハントゥが復興し始めた。この奇跡の話がカルティウムに伝わると、商人たちは久方ぶりに南部に、つまりはそこに広がるジャングルから得られる富と恵みに目を向けた。そして富と権力を兼ね備えた家に生まれた気高さと学識を持ったとある若者が、商機を求めてナハントゥへの旅に出た。その者がナハントゥにやってきたのは自らの意思ではなく従順さからであり、決められた人生とその責務を全うする意思を固めた人物だった。にもかかわらず、この若者は愛情深さに加え、好奇心に溢れた頭脳と前向きな精神を持ち、アカラットの話聞いて彼を探し出すという、すでに光によって導かれた行動を取った。

「君の名前は？」アカラットは聞いた。

「私はジュアリンです」若者が言った。

光によってジュアリンの全てを見通したアカラットは「君は籠に入れた驚きのような」と言った。「空高く飛んでいるべきなのに、翼を広げることすらできない。解放されたいかね？」

アカラットの核心を突いた言葉にジュアリンが呆然とし、涙を流して言った。「私を知らないのに、なぜこうも私のことをご存じなのですか？自覚すらしていなかったことまで」

「誰もが光の中で繋がっている」アカラットは言った。

「私を解放できますか？」ジュアリンが聞いた。

「無理だ」アカラットは言った。「君が囚人なのは確かだが、同時に看守でもある。鍵を持っているのが君なら、解放できるのは私ではない」

ジュアリンが聞いた。「なら、私はどうすればいいのですか？」

「答えは君の中にある」アカラットはそう言って若者の目に手を当てた。それはジュアリンが闇の中で初めて光を見つけ、世界を新たな視点で見ることができた瞬間だった。

そしてジュアリンは商売の道を捨てて六番目にして最も若いアカラット

の信奉者になり、他の者たちとともにナハントゥを癒す弛まぬ取り組みに加わった。そしてとうとう、この地に流れる水の色合いが緑と青に戻り、木々からとれる果実の苦みが甘みへと変わり、動物たちも本来の姿に戻った。風雨が悪意の腐臭を拭い去り、自然な生と死の香りが鳥のさえずりのように空気に満ちた。

毎晩、トゥセガは戸口に立ち、深く息を吸ってナハントゥの美しさに目を見張った。ある夜、彼が言った。「かつて、伝承を疑ったことがある。伝承の土地が本当に実在したのか、信じがたくなってしまったんだ。だが今は、先祖の言葉が真実だったことが分かる。とうとう、物語の中のナハントゥが我々のナハントゥになった。夢に見たナハントゥを、目が覚めても見るができる。夜が明けた時に感じる苦痛に怯える必要がなくなったんだ」

アカラットはトゥセガの言葉を嬉しく思ったが、同時に不安を感じていた。大いなる邪悪はそう簡単には滅ぼせないことを知っており、姿が見えぬ敵に付け狙われているような気がしていたのだ。彼はまだ自分の仕事がまだ終わっていないことに気付いていた。

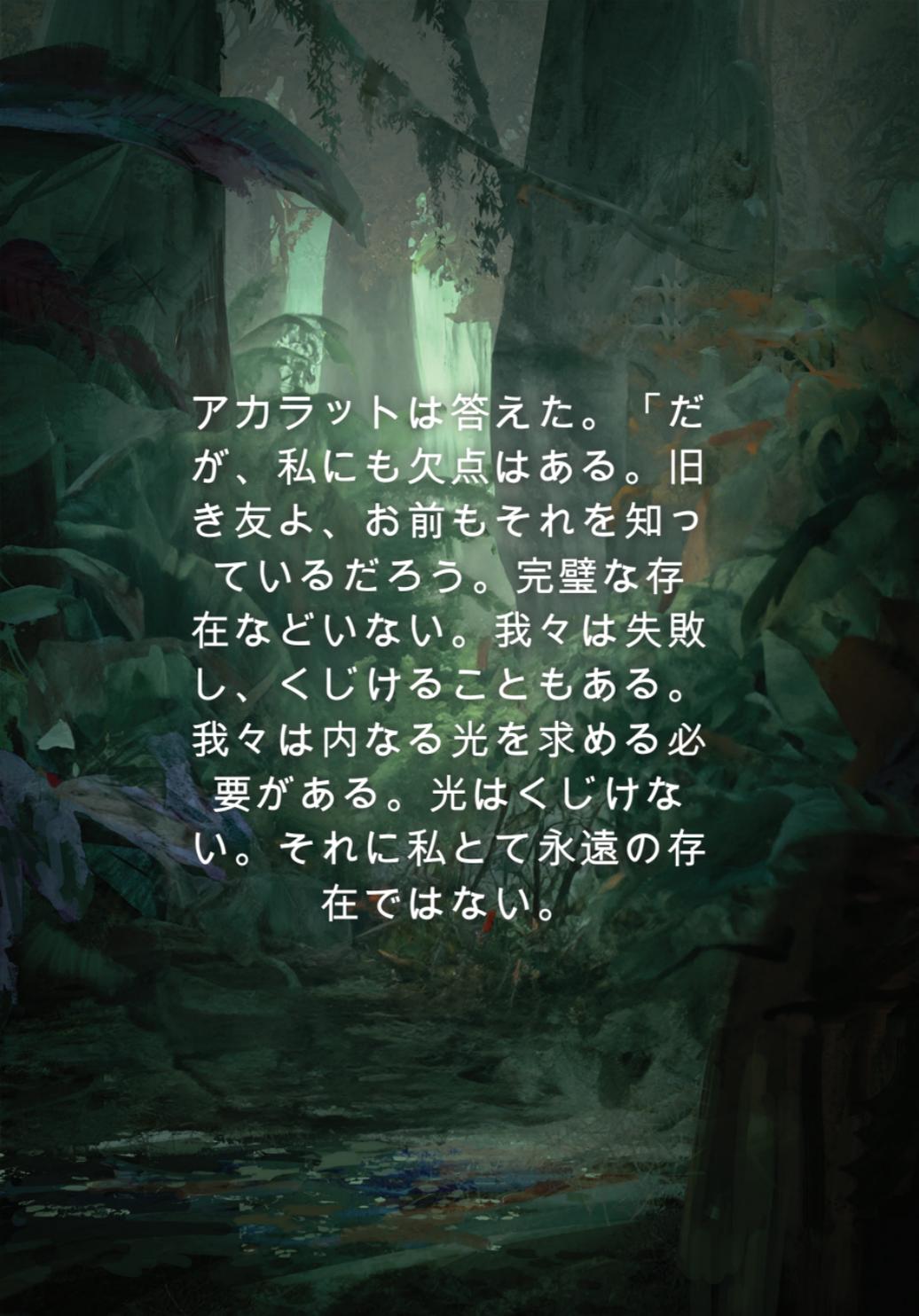
「ナハントゥは大切な場所だ」彼は信奉者たちに言った。「私にとつて、何よりも大切な場所なのだ。ここにはまだまだ我々が学ぶべきことがある。ナハントゥは、サンクチュアリにおいて唯一無二の学び舎だ。しかし偉大なる真実を学ぶには、我々全員がそれに相応しい存在である必要がある」

この挑戦的な言葉は信奉者たちに疑いを生んだ。光ではなく、自分たち自身に対する疑いだ。

グイラが言った。「私はケジスタンの砂漠の出身です。この場所と何の縁もない家系の私が、ナハントゥに認めてもらえるでしょうか」

アカラットは答えた。「血の繋がりがだけが家族ではない。暖炉だけが家ではない。共にいて最も心休まる人たちも家族になり得るし、家族を築く場所もまた家になり得る。グイラ、お前は私の家族で、私はナハントゥの出身だ」

次にイスタベラが聞いた。「我々がまだ見つけていない秘密とは何ですか？」



アカラットは答えた。「だが、私にも欠点はある。旧き友よ、お前もそれを知っているだろう。完璧な存在などいない。我々は失敗し、くじけることもある。我々は内なる光を求める必要がある。光はくじけない。それに私とて永遠の存在ではない。」

「ナハントゥに秘密などない」アカラットは答えた。「真実は、準備ができていない者には見えないだけだ。真実を学ぶことは奪うことではない。イスタベラ、真実は与えられるものだ」

次にアダヴィンが言った。「師よ、我々の足取りを地図に記してきましたが、南部地域の奥が未踏破です。我々が今求めている真実を探すなら、ここではないでしょうか？」

アカラットは答えた。「その素晴らしい地図も、お前がすでに真実だと考えているものの記録に過ぎない。そこに新たな真実はないのだ。内なる羅針盤を信じれば光へ導かれるだろう。そうすれば、光が全ての真実を明かしてくれる」

次にトゥセガが言った。「俺はお前たちが来るまで、ナハントゥを救えない無力な存在だった。俺の努力は全て無駄だった。そんな俺を、この土地が信頼してくれるのか？」

アカラットは答えた。「ほんの小さな口ウソクの炎も太陽と同じ炎だ。そして小さな思いやりの仕草も大いなる犠牲も、同じ愛からの行動だ。トゥセガよ、光は光だ。お前の内なる光が、お前を価値ある者にする」

次にジュアリンが言った。「皆さんの誰もが私よりもずっと賢く、強いです。皆さんに比べれば、私など光における幼子にすぎません。私は、準備ができていない者です」

アカラットは答えた。「森の中にふたつのドングリが落ちた。ひとつ目は小川の側の、陽光が溢れる場所に落ちた。それは簡単に根を生やし、満ち足りて育った。ふたつ目のドングリは古い木々の影になる、固い地面に落ちた。水を得るために地中深くまで根を張る必要があった。太陽を見つめるには枝を伸ばす必要があった。ある日、猛烈な風と寒さの猛吹雪がやってきた。ジュアリン、答えるのだ。この嵐に上手く耐えることができたのはどちらの木だ？」

「ふたつ目です」ジュアリンが言った。

「その通り」アカラットは言った。「試練が無くして成長はない。試練は君を強くする。君の人生は一つ目のドングリのように始まったが、二つ目の人生を選択した。まだ自分の力に気付いていないからといって、弱いということにはならない」

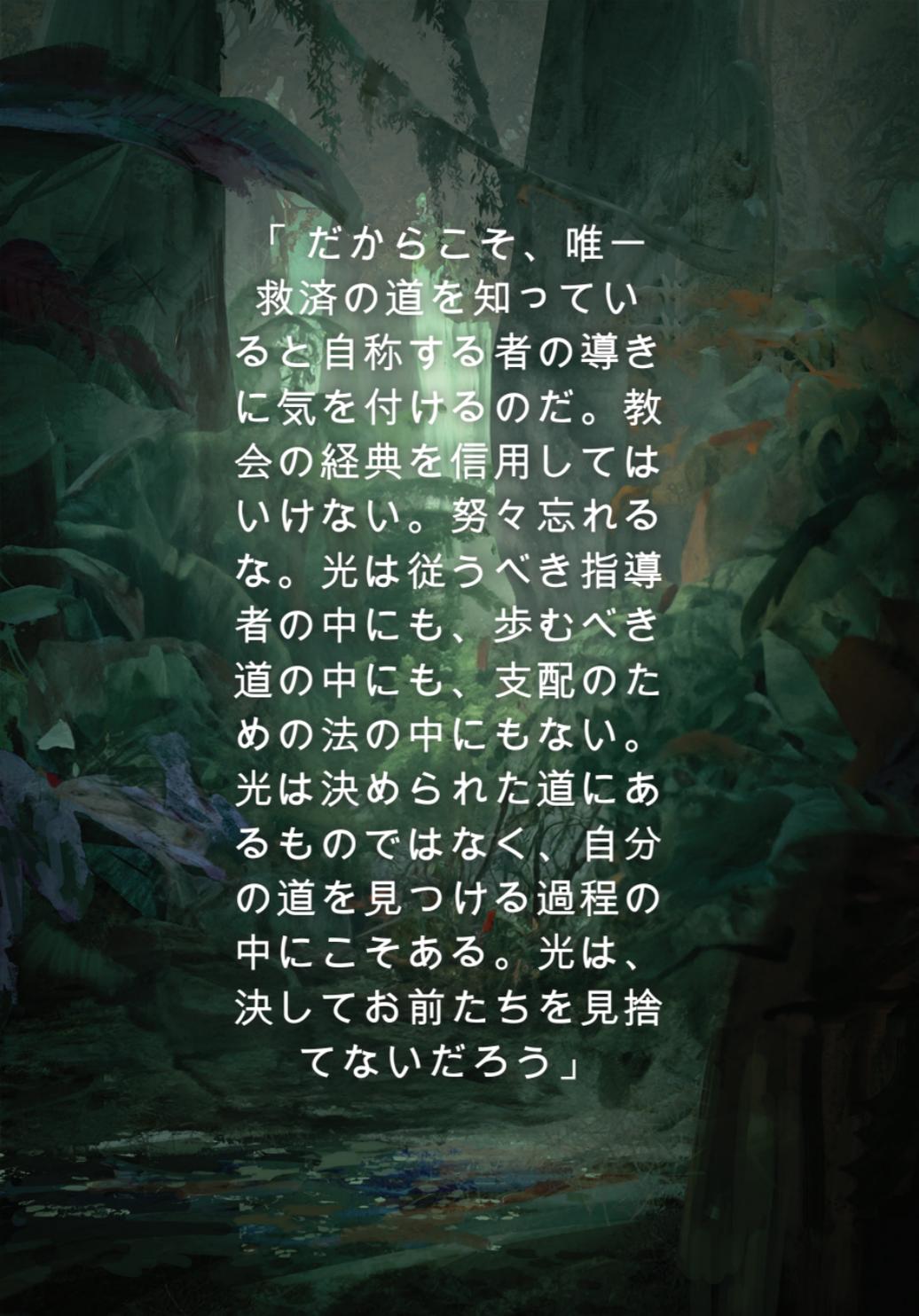
次にイセヴェエがアカラットに言った。「あなたと一緒になら、あらゆる事が可能になる。あなたに導かれていれば、私たちは価値ある者になれる」

アカラットは答えた。「だが、私にも欠点はある。旧き友よ、お前もそれを知っているだろう。完璧な存在などいない。我々は失敗し、くじけることもある。我々は内なる光を求める必要がある。光はくじけない。それに私とて永遠の存在ではない。お前だってそうだ、イセヴェエ。誰も永遠に生きることはできないが、我々の内にある光が消えることはない」

こうして慰撫の言葉を受けた信奉者たちは、気持ちを新たにしてアカラットに加わった。一行は八日間に渡って断食し、内なる光の声に耳を傾けた。そして九日目に沸き出でた精霊に導かれ、川の源流を辿るようにジャングルの中へと足を踏み入れた。たどり着いたのは、アダヴィンのどの地図にも描かれていない、ジャングルの中の開けた場所だった。我々の物語において、この空地はナハントウの贈り物と呼ばれ、感謝と畏怖の念をもって受け止められている。そこで何が起こったのかを知るのはスピリットボーンだけで、我々が物語ることはない。実際の所、あまりにも神聖で言い表す言葉がない。どのような言葉を用いても力強さや広大さが足らず、無理に言い表せば何かが欠けることになる。

ただ、これだけは言える。熟考と内なる葛藤を重ねた末に、アカラットは我々の肉体的世界とは異なる精霊の世界を見つけた。彼がナハントウに來たときから共にあったはずのそれは、目にする準備が整うまで隠されていた。そしてアカラットは、境界を越えた最初の存在となった

精霊の世界、すなわち霊界で、彼は大地ではない大地を見つけた。それはどこでもなく、同時にあらゆる場所だった。動物や植物、あらゆる種類の存在にも遭遇した。一部はアカラットが知っているクリーチャーや生き物の姿をしていたが、それ以外の存在の姿は奇妙で、最初こそ見覚えのある存在として生まれたのに、後になってあり得ないほどに引き伸ばされたような見目をしていて。その危険な美しさは、アカラットに心底の畏敬と当惑の念を抱かせた。彼は恍惚としながらさまよい、やがて奥深くに迷い込んだことに気付いた。永久に出られなくなり、肉体的世界に再び戻ることができなくなるのではないかと怖くなったが、光が元の場所へと彼を



「だからこそ、唯一
救済の道を知っていると自称する者の導きに気を付けるのだ。教会の経典を信用してはいけない。努々忘れるな。光は従うべき指導者の中にも、歩むべき道の中にも、支配のための法の中にもない。光は決められた道にあるものではなく、自分の道を見つける過程の中にこそある。光は、決してお前たちを見捨てないだろう」

導いた。そしてナハントウの空地で我に返った彼は、これらの一切を語った。信奉者たちにとっては、理解に苦しむ内容だった。

「霊界というのはサンクチュアリの一部なのですか？」イスタベラが聞いた。

アカラットはしばらく考えてから答えた。「双子の海がエスチュアの一部であるのと同じように、サンクチュアリの一部と言えるだろう。陸と海は互いに密接に結ばれており、常に触れあっているが、にもかかわらず、これらは互いに明確な区別がある」

「順番として、どちらが先なのでしょう？」アダヴィンが聞いた。「肉体と精神。サンクチュアリと霊界とも言えますが」

アカラットは肩をすくめた。「海が陸を囲っているのか、それとも陸が海を押しとどめているのかという話かね？私に分かるのは、光は海でも陸と同じくらいに明るく輝くということだけだ」

「どれくらいの間、手付かずの状態だったと思う？」トウセガが聞いた。

アカラットは答えた。「サンクチュアリ創造の時に生まれたのかもしれない。あるいは、それよりもっと後かもしれない。分かっているのは、あの場所は太古から存在し、海と同じように広大で深く、危険も存在するということだ」

信奉者たちも霊界を訪れることを望んだ。アカラットに方法を教わった一同は、何日もかけて霊界を歩き回った。信奉者たちはスピリットボーンのもととなる知識を得たが、発見に魅了された一同は、悪魔がナハントウに再び忍び寄っていることに気付かなかった。ジャングルの奥深くで、再び憎しみの種が育っていたのだ。

アカラットは初めて霊界を訪れたあと、頻繁に自らに問うた。光はなぜ自分を導き、霊界を見つけさせたのだろうか？自分はいそここでどんな役割を果たすべきなのだろうか？時が経つにつれ、アカラットは霊界を守る強力な存在たちのことを知り、彼らから多くの知恵を学んだ。そして、そんな霊界を守る精霊たちの中でも抜きん出た存在であるア・ブーランがある日、アカラットに警告を伝えに来た。

ア・ブーランが言った。腐敗が再びアカラットの母の故郷に根を下ろし

ており、憎しみの種を見つけ、その創造主を破壊しなければ、種は成長を続けるだろう。警告を受けたアカラットは、自らの精神を付け狙っていた敵がとうとう影の中から姿を現し、ついに彼に与えられた最後の役割を理解したような気がした。アカラットはア・ブーランに感謝を伝えたが、この啓示について信奉者たちには何も言わなかった。代わりに、信奉者たちに「光の聖廟」を建設するよう指示を出した。霊界とサンクチュアリの両方に跨る砦として、あらゆる邪悪から守られ、光を求める者たちが保護と平穏を得られる場所だ。

聖廟の完成前夜、アカラットは信奉者たちを集めて祝いの席を設けた。皆で歌い、あらゆる音色が光で満たされた。皆で踊り、つま先から頭の天辺まで光が流れた。皆で逸話を語り合い、共に成し遂げた全てのことに思いを馳せた。そしてアカラットは信奉者たちの前に立ち、愛と喜びに溢れた笑みを浮かべた。宝石のように輝いて見えた彼は、そこでかの「アカラットの別れの言葉」を口にした。

「我が愛する友よ。お前たちの中にある光が、私の中にある光を照らしてくれる。我々は共にある。離れていてもお前たちは私とともにあり、私はお前たちとともにある。光によって結ばれた我々を、何者も引き裂くことはできない。だが、気を緩めれば我らの衰えを招き、結束を失うことになるであろう力が存在する。その名は憎悪だ。今宵はお前たちが成し遂げたことを祝福する宴だが、悪魔への勝利は決して永遠のものではないことを忘れるな。そして、だからこそ、常に警戒する必要があることを忘れるな。錆びがどんなに固い鉄をも辛抱強く腐食させるように、憎悪はどんなに強い心も蝕むことを忘れるな。時間さえあれば、憎悪はどんなに高貴な目的をも墮落させ、どれほど強い絆であろうと壊し、最も誠実な道を闇へと向かわせる。ウンバル族はジャングルにおける道がどうなるのかを心得ているし、カルデイウムの商人は砂漠の砂がどれだけ早く痕跡を消すのかを理解している。だからこそ、唯一救済の道を知っていると自称する者の導きに気を付けるのだ。教会の経典を信用してはいけない。努力を忘れるな。光は従うべき指導者の中にも、歩むべき道の中にも、支配のための法の中にもない。光は決められた道にあるものではなく、自分の道を見つける過程の中にこそある。光は、決してお前たちを見捨てないだろう」

アカラットの発言を聞いたイセヴェエは動揺した。「今のは、まるで別れの言葉みたいだったけど」

アカラットは彼女を抱きしめて言った。「我々の命には限りがあり、人生は不確かだ。どんな発言も最後の言葉になり得るし、あらゆる別離は今生の別れになるかもしれない」

信奉者たちはアカラットのいない生活など想像もできず、抱いた不安を振り払い、音楽と踊りに戻った。しかしイセヴェエは、旧友への懸念を忘れることができなかった。彼女はその夜を、アカラットを監視することに費やした。そして彼が夜明け前に起き、独りでジャングルに入っていくと、どこに行き何をするのかを確認するために後をつけた。

アカラットは、再び現れた憎しみの種のところに向かった。種が根を張った場所のジャングルは、彼と信奉者たちが最初にナハントウにやってきた時の有様に戻っていた。離れた場所にある悍ましい泉からあふれ出す、毒性の黒い胆汁が、何もかもを捻じ曲げていた。

アカラットは歩みを進めながら憎しみの種を取り除き、再び大地を浄化していった。イセヴェエは尾行がばれるのも構わず彼を手伝おうかと考えたが、アカラットの光はひとりで十分な強さであることを証明した。胆汁によって狂暴化したジャングルの動物たちがアカラットを襲った時、イセヴェエは再び助けに入りかけたが、彼に自力で切り抜けてみせた。蛇でも、鳥でも、怪力のゴリラでも、アカラットは病んだ生き物とは戦おうとせず、光で彼らを治癒した。イセヴェエがアカラットに姿を見せることはなかった。闇の中、彼を独りで進ませるのも嫌だったが、隠れて後をつけている状況もまた後ろめたかった。

ジャングルが深くなった。腐敗が強くなった。イセヴェエが息を吸うと、憎悪の味が舌が焼かれるような気がした。邪悪が、彼女の肉体と魂を脅かすほど近くに感じられた。彼女は怯え、あと少しで引き返すところだったが、光を見ると力が沸いた。アカラットの後を追ったイセヴェエは、彼が暗い洞窟に入るのを見た。そこにはナハントウの呪いを作り出した張本人が棲んでいることを彼女は知っていた。アカラットの力を知っていても、彼のことが心配になった。こんなにも恐ろしい邪悪さを感じたことがなかった。あのような、燃えるような憎悪に心が触れたのは初めてだった。

た。周りの腐敗を通じて叩きつけられた憎悪には、ジャングル全てを飲み込まんとするほどの貪欲さがあった。

洞窟の中で、アカラットは狼に会った。そこにいるのが狼の肉体のみであれば、治療していただろう。だが、目の前にいる狼は盗まれた姿で、中で悪魔が動き、しゃべる毛皮のようなものだった。悪魔の声はイセヴェエテの骨を刺し、言葉は肌を鞭で打った。彼女は激痛に動くことも声を発することもできなかったが、何よりも耐え難かったのは、アカラットを独りで戦わせてしまうことだった。ただし、今となっては彼女が戦えなかったのは光の導きだと考える者も多い。なぜならそれによって、イセヴェエテはアカラットの献身を生きて見届けることができたからだ。

アカラットと狼の戦いは大地を揺らしたと言われている。彼らの戦いにナハントウ全域が震えた。木々が倒れ、川の流れが変わり、動物たちは吠え、叫び、金切声をあげた。アカラットは必死に戦ったが、敵は不死の存在である一方で自分が定命の者で、その力には限界があることは理解していた。戦いが続くと、彼は定命の者の必然として手足に疲労を感じた。アカラットは命が尽きるまで戦って、敵を倒せぬままにする危険を冒すのではなく、自らが選んだやり方で戦いを終わらせた。彼は狼を欺いて、自分を噛むように仕向けた。飢えていることは分かっていた。牙があまりにも深く突き刺さったため、アカラットは狼を捕まえ、逃げられないようにすることができた。そして、アカラットは自らの中に満ちていた光を解放した。彼の中から溢れだした光はあまりにも眩く、まるで太陽が空から降り、洞窟にやってきたかのようだった。

狼が吠え、そして燃えた。光がその顔の皮を剥がし、その下にある骨が使い終わった薪のように焦げた。やがて力尽きたアカラットは狼を捕まえていられなくなり、拘束を解いた。悪魔は洞窟のさらに奥へと走り去り、元いた世界に通じる場所にたどり着くまで下へ下へと逃げた。狼はそのような痛みを経験したことがなかった。狼はそのような恐怖を経験したことがなかった。狼は忘れまいと誓った。この記憶に蔭かれた憎悪の種は、アカラットとナハントウへの憎しみをひたすらに募らせ続けるだろう。

イセヴェエテがアカラットに駆け寄り、膝をついて抱きしめると涙が彼の頬の上に落ちた。彼には喋るだけの力は残っていなかったが、愛する友を

見て、喜びの笑みを浮かべながら死んだ。死してもなお、唇は微笑みを形作っていた。

イセヴェテが彼の死骸をジャングルの外まで運び出すと、信奉者たちは言葉にできないほどの悲しみに打ちひしがれた。

「役に立てなかった」イセヴェテが言った。

「私たち全員がそうよ」イスタベラが言った。

「それは違うと思います」ジュアリンが言った。「付き合いこそ皆さんより短いです、私だって同じように彼を愛していました。本当に彼の役に立ちたいのなら、その犠牲を称えることを考えるべきです」

「どうやって称えるんだ？」とアダヴィンが聞いた。

グイラが答えた。「アカラットが亡くなった今、私たちが彼の後を継ぐんだ。あらゆる者に真実と光の加護を提供することこそ私たちの義務だ」

「そうですね」ジュアリンが言った。「彼の教えを文字にする必要がありません。彼の言葉を広められるように」

ジュリアンの言葉に、イセヴェテが反応した。「経典を作ると言うの？ 昨晚のどんちゃん騒ぎで頭が鈍った？ 彼が私たちに言ったことをもう忘れたの？ 光は、道自体ではなく己の道を見つける過程にあると言っていたでしょう」

「ちょっと待って」とイスタベラが言った。「私たち六人でどうやってサンクチュアリ中の人々に教えを授けるっていうの？」

するとトゥセガが口を開いた。「ナハントウでは、古い物語によって真実を次の世代へと伝える。これならば多難な時代だろうと、安全に受け継がれる」

「それは素晴らしい提案ですね」ジュアリンが言った。「私たちがアカラットの真実と彼の教えを物語や寓話、芸術、歌に残せば、それは風に乗った種のように広がっていくでしょう」

イセヴェテがそれでも反対して言った。「どんなものでも憎悪の腐敗には抗えないわ。唯一の例外は、純粹なる光だけ」

「確かにそうだね」グイラが言った。「だから私たちは、腐敗を防ぐために全ての行動に光を伴わせる必要がある」

イスタベラとアダヴィンとトゥセガは、グイラとジュアリンに同意し

た。イセヴェテは懸念を感じていたが、意見の相違はひとまず忘れ、信奉者たちは一緒にアカラットの遺体を処置し、傷を綺麗にして服を着せた。アカラットが最後の眠りに持っていけるよう、イセヴェテは彼の母親の物だった翡翠の彫刻を探したが、見つからなかった。彼の最後の戦いで、あの小さな像はジャングルのどこかに落ちてしまったのではないかと彼女は不安を感じた。

「遺体は光の聖廟に安置しましょう」イセヴェテが言った。「安全に眠れるようにしてあげるの」

そして信奉者たちはアカラットの死体を霊界へと運び、彼を中心に光の聖廟を完成させ、彼の墓を守るために、イスタベラが巧妙な守りの仕掛けを考案した。それが完成すると信奉者たちは最後の別れを告げたが、その内容は明らかになっておらず、スピリットボーンですら知る者はいない。イセヴェテは最後までそこに残り、長い間、独りで悲しみに暮れていた。そして信奉者たちはアカラットが眠る場所を封印した。彼は今でも光の聖廟に眠っている。どのような穢れも腐敗も手が届かぬ場所に。

これで、アカラットのナハントゥ来訪に関する物語は終わりだ。私は自分の言葉を書き記すことを許可した。アカラットは望まなかっただろうが、そうするだけの価値がある。なぜなら、書き記された嘘が存在するからだ。言葉を使った戦いが起きるのなら、真実を送り出さなくてはならない。光の道を敷き、アカラットの名において金をせしめる者たちよ。私の説教を聞いていたか？どれだけ誤った道を進んでも、やり直すことはできる。憎悪がお前を飲み込んでも、内にある光は決してお前を見捨てない。それを導きとして、戻ってくるのだ。